

福田 豊四郎 (ふくだ とよしろう)

1904～1970年。秋田県鹿角郡小坂町出身、本名・豊城。洋画家・鹿子木孟郎、日本画家・川端龍子、土田麦僊に師事。1924年第5回帝展で《水泳ぐ子等》が初入選。1928年京都市立絵画専門学校卒業。1929年川端龍子の青龍社創立に参加。1930年第11回帝展で《早苗曇り》が特選。1948年山本丘人、吉岡堅二らと創造美術(現在の創画会)を結成。1965年武蔵野美術大学教授。

「氷原」

1958(昭和33)年
95.4×191.0cm

紙本着色額装
秋田県立近代美術館蔵



荒々しい筆致に命への思いを込め

凍^いてつく氷の原野に横たわる4頭の犬。周囲には死骸をついばむ鳥が集まり、彼らが既に事切れていることが分かります。残された手前の1頭は、仲間^いの死を悼むかのように悲しげな遠吠えをあげています。秋田出身の日本画家・福田豊四郎が描いたこの作品の題材となったのは、同年に大きな話題となったある出来事です。1958年2月、悪天候で観測船宗谷が接岸できなかったため、南極の昭和基地に樺太犬15頭が置き去りにされたのです。人命優先でやむを得なかったとはいえ、犬たちを見殺しにした行為への憤りが豊四郎にこの作品を描かせました。寒色主体の色彩と荒々しい筆致、悲痛な遠吠えの表情には、人間の身勝手さによって犠牲となった生命への思いが込められています。

翌年1月、昭和基地に到着した第3次南極観測隊が15頭のうちタロ、ジロの2頭の生存を確認しました。この奇跡の生還は大きな話題となり、後年映画などにも取り上げられたのでご存じの方も多いことでしょう。ちなみに1991年の環境保護に関する南極条約議定書締結により、現在では犬などの外来生物を南極に持ち込むことは固く禁止されています。

※本作品は、2026年1月8日(木)～4月12日(日)に開催の第3期コレクション展「華と棘(ハナとトゲ)」で展示予定です。